

モモ・スモモの低温遭遇時間と休眠覚醒

西元直行 (鹿児島県果樹試験場北薩支場)

Naoyuki NISHIMOTO : Effects of Exposure Period to Low Temperature on Rest Completion of Peach and Japanese Plum

本県は落葉果樹栽培の南限に位置しているために、落葉果樹の休眠の課題は栽培適地性判定のためや、施設栽培におけるビニール被覆及び加温開始時期の決定のために解決しなければならない大切なことである。したがって本県における休眠覚醒時期とそれに必要な低温遭遇時間について検討したので、その結果をここに報告する。

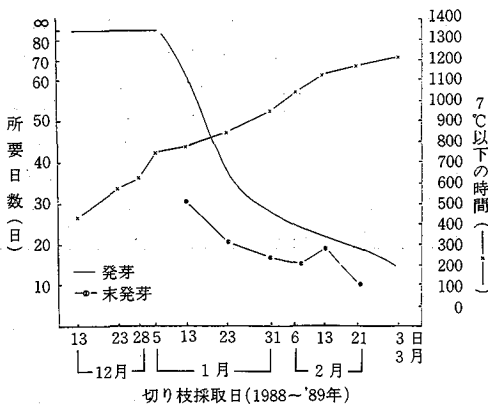
1. 材料及び方法

果試北薩支場 (東郷町) に植栽しているモモ (ちよひめ等) スモモ (七郎等) から採取した結果枝 (2年生枝) を供し、20℃のインキュベータ内で、水さし法で発芽、開花に要する日数を調査した。休眠覚醒の判定は、モモは実際圃場と同等の発芽、開花率をみたとき、おおむね70%以上の発芽、開花までの所要日数が30日位になった時とした。スモモは出蕾、発芽、開花に要する日数が1月末以降になると格段に短くなる時期がある。その時を休眠覚醒時期とした。供試枝の採取は12月～3月に随時実施した。低温遭遇時間の調査は気象観測記録紙から7℃以下に低下した時間をすべて計測し、供試枝採取時期までを積算し求めた。

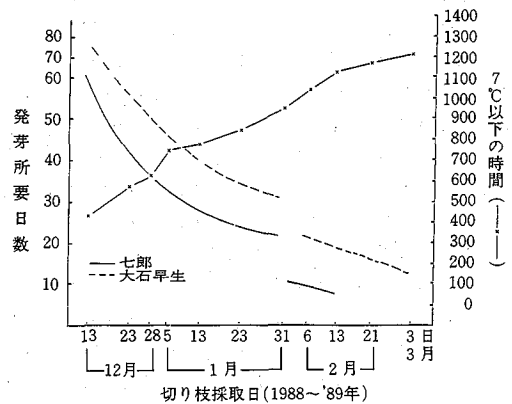
2. 結果及び考察

(モモ) 12月末までは発芽がみられず、それ以降1月

初旬迄は葉芽の発芽のみで、花芽の動きは認められなかった。その後花蕾の発育がみられた。約30日で露地栽培と同等以上の花蕾の発育が認められたのは、1987年1月28日、'88年2月19日、'89年1月31日の採取枝であった。この時期以降になると切り枝でも短時間で一斉に開花した。したがって休眠覚醒に必要な7℃以下の遭遇時間は1987年820時間、'88年1085時間、'89年964時間であり、鹿児島県東郷町での自発休眠覚醒時期は2月5日、7℃以下の低温に987時間遭遇する必要があった。(スモモ) 12月上旬採取枝でも20℃で60日後には発芽しており、1988年12月22日採取枝は大石早生が60日後に、七郎は40日後に100%の発芽をみた。12月10日から1月31日のいずれの時期に採取しても20℃条件下では2月10日頃に発芽した。これは1988年も同様であった。七郎が大石早生よりも温度感受性が高く短い時間で出蕾、発芽した。鹿児島県東郷町での七郎スモモの自発休眠覚醒時期は1988年2月10日、'89年1月31日であり、その時の7℃以下の遭遇時間は'88年940時間、'89年964時間であった。2か年平均すると、2月5日、7℃以下の低温に952時間遭遇する必要があった。大石早生は約7日遅れであった。



第1図 モモの切り枝 (花芽) の発芽までの所要日数



第2図 スモモの切り枝の発芽までの所要日数

第1表 モモの休眠覚醒時期と7℃以下の低温遭遇時間

年次	休眠覚醒時期	7℃以下の遭遇時間
1987	1月28日	820
1988	2月19日	1085
1989	1月31日	964
平均	2月5日	987

第2表 スモモの休眠覚醒時期と7℃以下の低温遭遇時間

年次	休眠覚醒時期	7℃以下の遭遇時間
1988	2月10日	940
1989	1月31日	964
〃	2月6日 (大石早生)	1056
平均	2月5日	952

注) 品種: 七郎